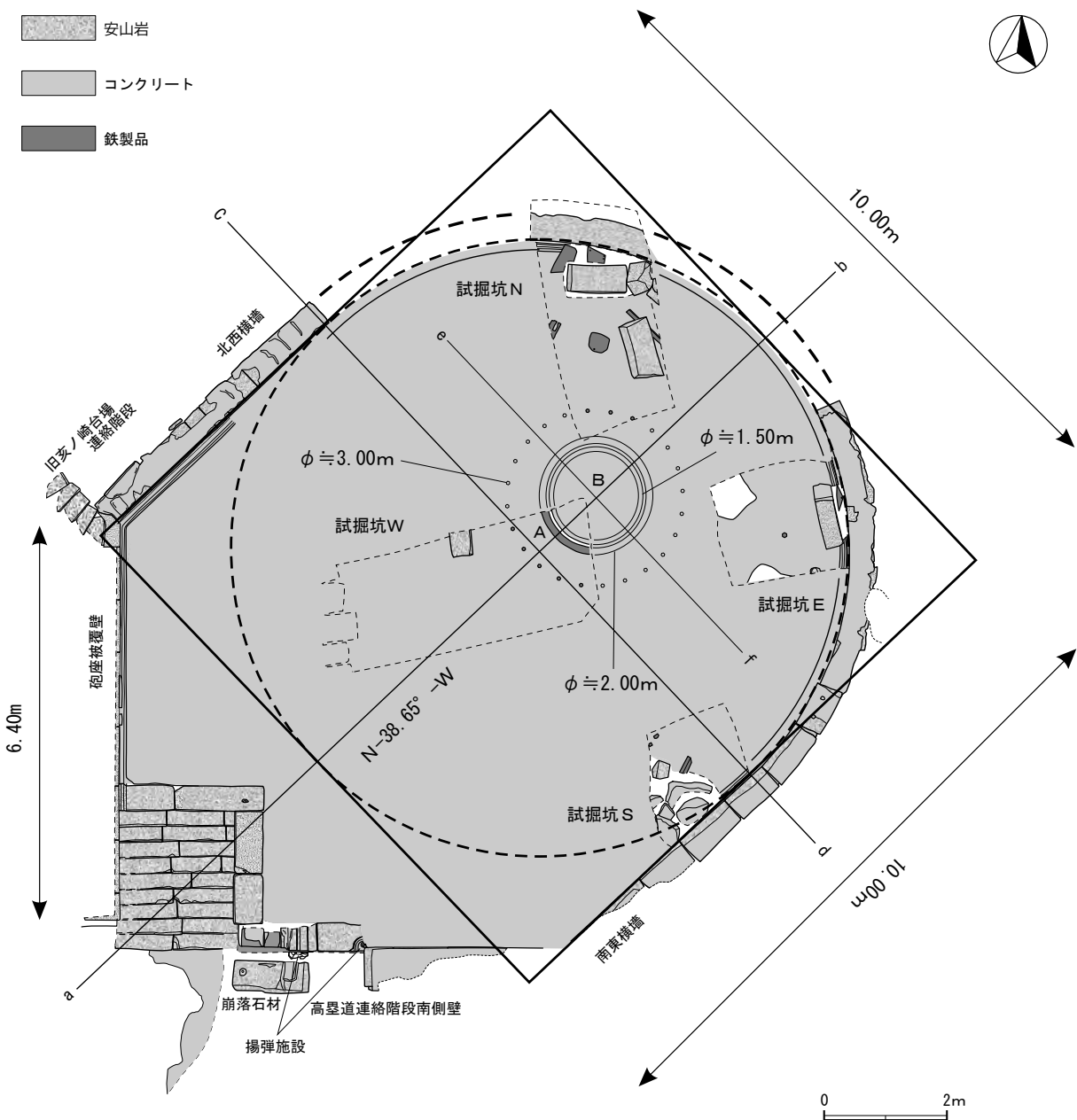


第3章 まとめと今後の課題

第1節 猿島砲台跡・第一砲台第二砲座（第24・25図）

猿島砲台跡・第一砲台第二砲座に設定した試掘坑では、砲床面が試掘坑Eでわずかに欠損している以外良好に遺存していることが確認された。また、胸墻・横墻の被覆壁に沿って排水溝が存在し、砲座西側被覆壁に連絡して砲座—高塁道連絡階段まで延伸していることも確認された。砲床面では付帯施設として外縁を鉄帯で被覆された溝を伴うコンクリート造円錐形構造体、その外側で同心円上に配置された六角ボルト列が検出された。



第24図 猿島砲台跡・第一砲台第二砲座基本設計線

砲座－高塁道連絡階段の西壁も兼ねている西側砲座被覆壁は約 6.40m 北に延伸して北西横牆被覆壁と連絡、北西横牆被覆壁は約 45° の角度で東傾、約 5.0m 延伸して胸牆と連絡している。胸牆は半径約 5.0m の半円で、北西横牆と平行する同規模の南東横牆被覆壁に連絡している。北西横牆端部 (W)、南西横牆端部 (S) を結ぶ線 (W-S) と平行する胸牆半円頂部の接線 (N-E) は、北西横牆と南西横牆の走向線 (W-N、S-E) の交点で、一辺約 10.0m の正方形 (N-E-S-W) となり、胸牆の半円と重なる内接円とともに、砲座・砲床の基本的な設計線となっている。コンクリート造円錐構造体は砲架を載せる基筒と関連する構造体と推定され、その中心は内接円の中心から中央軸線 (a-b) 上約 1.3m 北東に位置している。試掘坑で検出された範囲から、コンクリート造円錐形構造体の直径は約 1.5m、外周溝の付帯鉄帯外端の直径は約 2.0m、同様に基筒固定用と考えられる六角ボルト列は 24 個前後で構成され、直径約 3.0m と推定される。

このような砲床構造は 24cm 加農砲が据付られた猿島砲台跡・第二砲台第四砲座と異なり (野内他 2005)、走水低砲台跡の砲座と近似している (第 24 図)。明治 26 年 (1893 年) に砲兵第一方面に海岸砲据付が指示されるが、走水低砲台には「廿七珊米加農 (総テ三十口径) 三門」、猿島砲台には「廿七珊米加農 (総テ二十八口径) 二門 但猿島第二砲臺 (第一砲台と改称前の名称) へ据付内一門ハ走水砲台 (走水低砲台と改称前の名称) ニ据付アル分ヲ茲ニ移ス」(11) とされた。

戦後間もなく猿島に渡島した岩崎義朗の記録によれば、第一砲台に備砲されていた 27cm 加農砲に付けられていた名札には、一門は「F. 80 FORGES & CHANTIERS DE LA MEDITERRANEE HAVRE 1888」、一門は「F. 80 FORGES & CHANTIERS DE LA MEDITERRANEE HAVRE 1892」、と書かれていた (岩崎 1952)。また、赤星直忠の野帳から、前者は第一砲座、後者は第二砲座に据え付けられていた加農砲と特定できる。明治 25 年 (1892 年) 制作された 27cm 加農砲は第二砲座に据付、明治 21 年 (1888 年) に製作された 27cm 加農砲は走水低砲台から移設、据え付けられたと判断される。

明治 26 年 (1893 年) に猿島第一砲台と走水低砲台に据え付けられた 27cm 加農砲は、前者は 28 口径、後者は 30 口径と口径の違いはあるが、今回調査の対象とした第二砲座のコンクリート造円錐形構造体と六角ボルト列は両砲台とも近似した規模、構造だった。また、明治 37 年 (1904 年) に、走水低砲台の加農砲は斯加式 27cm 加農砲と交替据付られ、「各砲座射線ノ方向相一致セス且各砲ノ軸心位置一直線上ニ無ニテ射撃上不便」(12) であることから砲座の改築が行われた。現在、残されている中央の構造体はこの時に改築されたと考えられるが、明治前期から後期に備砲された固定砲の砲床構造の近似性を示している。両者に見られる構造上の差異など詳細の変化は、未調査の猿島砲台跡・第一砲台第一砲座の砲床構造の確認とともに今後の課題としたい。



1. 走水低砲台跡・円錐形構造体と丸鋼列



2. 走水低砲台跡・外縁を鉄板で被覆された溝

第25図 走水低砲台跡のコンクリート造円錐形構造体

第2節 猿島砲台跡・第一砲台—第二砲座連絡隧道

隧道内の旧路面の排水系統を考察するうえで、南側坑口付近に設置された水溜桝との関係性は重要である。

水溜桝の建設は、隧道・弾薬元庫建設のほぼ終了した明治17年(1884年)3月8日～5月31日にかけて行われた。その後、「降雨等ニ際シ雨水右桝前ニ溢レ隧道内部ノ両側ノ小溝ニ流落スルモ充分排水ノ便ヲ得サルヨリ右小溝前ニ溢出シ遂ニ隧道内部両側基脚ノ土砂ヲ流出シ漸次破壊」したことから、明治22年(1889年)に「従来ノ構造ヲ変換シ充分排水ノ便」を得るために「水溜桝隧道内部両側ノ小溝」の改修工事が行われた(13)。

平成23年(2011年)に実施した第5次調査では、水溜桝内の排水施設は後補である可能性を指摘していた(第1章第2節2、図版6-6)。今回の調査で設定した第8トレンチから検出した石造排水溝の北側部分が、水溜桝で確認された後補と推測される緑色凝灰岩と同じ石材を使用していたことから、前述の明治22年(1889年)の改修工事の内容が貯水施設内の排水溝新設と水溜桝からの排水の流末を変更して隧道路面中央部分に設置する暗渠へ接続するというものであったことを確認することができた。この暗渠については、第5トレンチで検出した鉄管の規模からもその存在を裏付けるものである。改修工事は、隧道旧路面の排水系統を路面両端の経路から、路面中央の暗渠に変更する大規模なものであったことが伺える。

第5トレンチからは、鉄管のほかにその下部からアスファルトと破砕した煉瓦片を検出した。土層の観察からは、鉄管の掘方が煉瓦片を包含する層を掘りこんでいることが確認できる。煉瓦片は隧道本体で使用される東洋組の煉瓦とは色調が異なり赤褐色を呈する。隧道が竣工した明治17年から排水経路を変更する明治22年(1889年)の改修工事までの間に、文献記録では探せない小規模な排水の整備が行われていた可能性を示唆する。第5トレンチの検出状況からは、明治22年(1889年)の改修工事で既設の排水施設(その時には破損していたか)を除去し、新しく鉄管を敷設する工事を入れたものと推測される。

第3トレンチで検出した煉瓦造構造物については溝状を呈しており、同じく小規模整備の痕跡である可能性が高い。このことは、隧道の外である第二砲台—隧道連絡墨道の排水溝の観察からも推測される。墨道は水溜桝からの当初の排水溝と推測される石造排水溝の石材(粗粒凝灰岩)と同じ石材で路面両側に排水溝が設置されている。しかし、隧道南側坑口に向かって直線となる墨道の西側は、粗粒凝灰岩製の石造排水溝ではなく、半径土管造と煉瓦造の排水溝が設置されている(図版6-7)。いずれも時期は不明だが、排水施設については軽微な補修が繰り返されていたことが推測される。

一方、第1トレンチで検出した厚さ40cmのアスファルト被覆コンクリートは、その直上から煉瓦片のブロックを検出している。コンクリートは脚壁基礎石に接着し、第4トレンチで検出したような小溝は確認できなかった。明治22年の改修工事によるものかどうか時期の特定ができないことと、路肩の補修にここまで厚さを必要とするのか構造的な補強の意味があるのかどうか検討が必要であり、今後の課題である。

第2・第4～7トレンチでは、同時期の施工と推測される帯状コンクリートを検出した。地山である上総層群浦郷層を整形して敷設されていた。第5トレンチで検出した鉄管の覆土層の直上に打設されていることから、明治22年(1889年)年の改修工事時のものと推測される。

猿島砲台跡は、砲台建設の第1期(明治14年度～22年度)の砲台を構成する施設の造営と不具合の解消工事、第2期(明治24年度～27年度)の備砲工事や電気関係工事、第3期(明治30年度～34年度)の弾薬元庫改修や第二砲台観測所増設といった工事を踏まえ、現在我々が目にする猿島砲台跡の姿となっている(その後海軍による防空砲台の設置がある)。今回の調査により、明治17年(1884年)に一応の竣工をみせた猿島砲台が、施設の不具合により5年後の明治22年(1889年)に実施した排水設備改修というインフラ整備の実相を確認することができた。今回得られた所見は、隧道及び弾薬元庫の整備工事を検討する中で活用していくものとする。

第3節 猿島高角砲台跡・第四砲座（第26・27図）

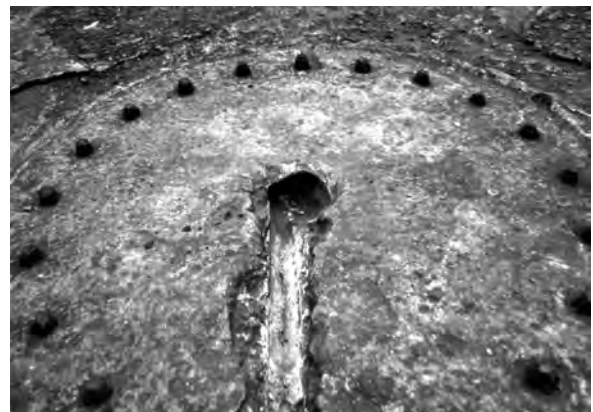
8 cm 高角砲台跡・第四砲座は砲床—砲員待機所連絡階段が埋没していたが、埋積土を除去、砲床面を清掃したことによって、砲員待機所の天井が撤去されている以外は良好な状態で遺存していることが確認された。第四砲座で確認された雨水などの排水系統は、砲床面の排水系統と砲床—砲員待機所連絡階段下の半地下式空間の排水系統に大別される。砲床面の排水系統は砲床外周に沿って付設された排水溝と中央円孔から直線的に延伸する埋設鉄管からなり、砲床東端で合流して埋設円形土管を經由して東側崖に排水する路線となっている。砲床外周に沿った排水溝は、高位排水溝と低位排水溝で構成されている。砲床南東端に位置する高位排水溝は弧状を呈して、弧線中間点で標高 21.931m、弧東端で標高 21.910m、弧西端で標高 21.913mと 2.0cm ほどの比高差を以て緩やかに低下し、雨水などは東西に分流して低位排水溝に連絡している。低位排水溝の連絡点は西側低位排水溝、東側低位排水溝ともに標高 21.897mで、高位排水溝と低位排水溝は約 1.50 cm の落差で連絡している。低位排水溝は東端部、標高 21.8871mの地点で、約 1.0cm の傾斜で合流し、埋設円形土管を經由して砲床外に排水されている。また、砲床中央に円孔が存在し、東西の低位排水溝合流部に鉄管が埋設されていた。第四砲座では砲床面が良好に残されていたため、その路線は確認できなかったが、第一砲座では円孔から砲床外縁に沿った低位排水溝に向かって直線的に延伸する溝が認められ（第26図1）、溝底には鉄錆の付着した断面半円形のコルクが残されていた（第26図2）。このコルクは鉄管の基盤で、砲床下に埋設された鉄管は砲床中央付近の雨水などを円孔から砲床外に導水する排水管と判断される。

砲床—砲員待機所連絡階段を降りた砲員待機所前の平坦な路面には、その中央で砲床南西部を形作る円筒壁面に近接して排水目皿がはめ込まれた埋設円形土管による排水管が存在した。路面はきわめて微妙な傾斜をもって、雨水などを排水溝に導水するように仕上げられていた。東西の階段直下の路面は標高約 20.50m、連続する路面は東西とも標高約 20.48~20.49m、さらに内側の路面は標高約 20.47~20.48m、そして排水口周辺で標高約 20.47mと漸移的に低下している。排水口内には円形土管が付設され、排水口から約 57.0 cm 垂下して砲床面と平行に方向を変えて砲床中心点に向かって延伸しているが、連続する円形土管などは砲床を形成するコンクリート下に存在しているため、排水路線など詳細は確認できない。

今回の調査で砲床面の排水系統、砲員待機所前の半地下空間の排水施設が明らかになった。しかしながら、8 cm 高角砲の砲床への固定方法、砲員待機所前の路面に埋め込まれた「U」字金具、側壁に穿孔された円孔、南東階段側壁に付帯する矩形の棚などの機能は不明で、その把握が今後の課題となった。また、砲員待機所の裏込めに使用された凝灰岩亜角礫は、その岩質と摩擦・擦過作用による亜角礫化は 8 cm 高角砲台跡・第四砲座北側の岩礫海岸の転石と近似していることから、島周辺海岸の転石が利用された可能性が高い。

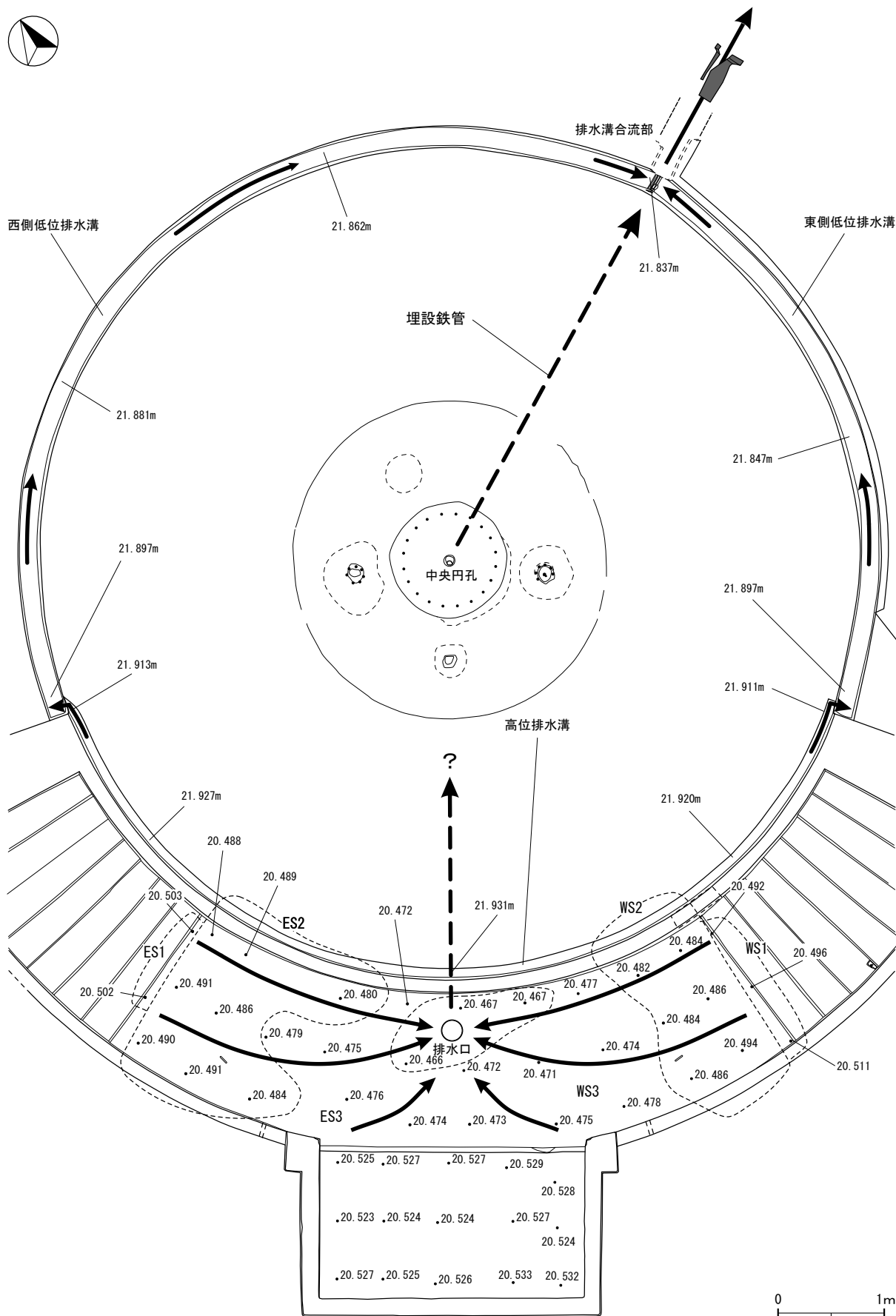


1. 8 cm 高角砲台跡・第一砲座



2. 中央円孔と鉄管付設痕を残すモルタル

第26図 8 cm 高角砲台跡・第一砲座排水施設



第27圖 8 cm高角砲台跡・第四砲座排水系統圖

第4節 現状調査

第2章第4節で記述した健全度調査の結果から、構造物としての安定性評価と整備の課題を抽出した。

- ・地質調査の結果から、隧道および弾薬元庫1階は岩盤（砂岩・泥岩）の中に根入れされていること。
弾薬元庫2階は埋土層の中に入っており、埋土層は隧道上部の東側まで広がっていること。
第一砲台棲息掩蔽部の左室は地山内に入っているが、右室は隧道と切通面に挟まれた埋土層の中にあること。
- ・煉瓦造隧道及び弾薬元庫脚壁のコア抜き調査により、目地を含む煉瓦コア供試体の圧縮強度が 10N/m^2 程度であること。
供試体の目視観察では、表層部分の煉瓦は風化が進むが、目視で健全箇所、不良箇所と区別した箇所であっても、どちらも内部の劣化は進んでいないように観察できること。合わせて躯体内部の目地抜けのないことを確認できたこと（巻頭図版4）。
- ・小口径ドリル削孔により煉瓦造隧道の天井の巻厚は、 1.2m 以上あること。
隧道水平部分の側壁不良部の2箇所の削孔では湧水が認められたが、傾斜部の3箇所の削孔では湧水も空隙も認められなかったこと。
- ・構造解析の結果から、煉瓦に発生している応力は、圧縮強度（ 10N/m^2 程度）に比べて小さいこと。
隧道、弾薬元庫、第一砲台棲息掩蔽部のアーチ部で一部壁面付近に引張応力が発生しており、アーチ部では目地の開口や煉瓦の亀裂が発生しやすい状況であること。
Mohr-Coulombの破壊基準に基づく各断面の煉瓦造構造物の安全分布率は3程度となっており、構造物は静的には安定した状態にあること。

以上のことから、隧道本体は 1.2m 以上ある厚い煉瓦造脚壁と天井により構造的に強固な躯体であり、建築材料である煉瓦の著しい劣化は認められず、岩盤に根入れされていることから構造物として安定していると判断した。しかし、隧道天端の目地開口部分や補修痕の劣化箇所は、大きな地震の際に内背の煉瓦が落下する可能性があり補修等の対策が必要である。また、漏水については、長期的には目地や煉瓦の劣化を誘発する恐れがあり、短期的には水抜き孔の設置、長期的には浸透を抑制する方策などの対策が必要である。

弾薬元庫は、1階部分は岩盤の中に根入れされているが、2階部分は埋土層の中に入っているため、地震発生時には揺れが大きくなりやすく、妻壁などの亀裂の誘因となったと推測される。特に吹き抜け室は1階の天井がないため地震時に揺れやすく大きなせん断力を受けて大きな変状をきたしたと推測される。今後、大きな地震が発生した場合、崩落する危険性があり、対策が必要である。また、天井の亀裂についても耐震上注入などの対策が必要である。

第一砲台棲息掩蔽部は、前面壁に大きな亀裂の入る右室は左室のような地山の拘束が少ないため地震時の揺れが大きく作用したと推測される。前面が開削されているため、地震の揺れにより背面土の押し出す力が作用し、隧道北側坑門東側と石積擁壁との間の隙間の発生や、石積擁壁の亀裂の発生の誘因にもなったと推測される。掩蔽部内部の亀裂・開口部の修復が必要である。また石積擁壁の空隙、特に上部は地震時に崩落する可能性があるため対策が必要である。

また、漏水対策の検討に必要な基礎資料収集のため実施した旧排水施設調査では次のことを把握した。

- ・地上部分からの雨水の浸透を想定して設置された隧道肩部の排水施設である小口径煉瓦造構造物は、南側坑門に排水の流末を設定し、内部は底面をV字としたアスファルト敷設による防水処理が施されていたこと。
隧道からの排水口と推測される箇所が一定の間隔で設けられていたこと。右側（東側）の内部は、南側坑門より 15m 付近から底面のV字部分に亀裂が入り、隧道側の漏水による変状を確認した範囲と整合が取れるこ

とから、隧道東側脚壁の漏水は滞水した雨水がオリジナルの排水施設の劣化により隧道側に漏れ出していることが原因と推測されること。

左側（西側）の施設は、隧道に並行して直線ではなく、南側坑門から 2.4m 付近でクランク状を呈しており、弾薬元庫との関係が推測されること。また、4.8m 付近で構造物内部に障害物があり、おそらく破損していると推測されること。

以上のように、現状調査により土木構造物としての基礎資料の収集と今後の史跡整備のなかで対策を検討すべき箇所の抽出を行うことができた。隧道内部の漏水については、調査終了後の平成 30 年（2019 年）から小口径ドリル削孔箇所 No.2 からの水の流出量を継続して把握するため雨量計を設置し、屋外に設置した雨量計と合わせてモニタリング調査を継続している。隧道平坦部の上方、地表部分は展望広場として開けており雨水が直接地中に浸透しやすい。隧道傾斜変換点以北の地表部分は樹木に覆われており、隧道内部の傾斜部分は漏水の変状が確認できず、雨水の浸透量や速度が異なることも推測される。

また、今回の調査のなかで、隧道脚壁の内部に縦樋状の水抜きと考えられる改修が 8 箇所で行われていたことを確認した。第 1 トレンチ、第 3 トレンチ、第 5 トレンチで確認された煉瓦ブロックや煉瓦造構造物の一部は、刻印による判別ができなかったが、隧道本体を構成する東洋組の煉瓦の色調と異なり赤褐色であり、建設当初のものではなく改修工事によって設置され、さらにその後の改修工事で破損した可能性がある。長年使い続ける中での各種改修工事が何度も行われてきたことが推測される。今後、整備工事の方針および工法を検討する中で、大規模修理と中規模修理、日常の維持管理方法といったことを視野に入れた計画が、長期的に史跡の保存につながるものとする。

現状調査の成果を踏まえた隧道を中心とした整備の方針検討は今後の大きな課題であるが、そのほかに今回の調査でアスファルトのサンプリングを行っている。小口径煉瓦構造物内部確認調査で開口した煉瓦造排水施設の V 字状の底面アスファルト、隧道路面の第 1 トレンチおよび第 5 トレンチで検出した調査区底面のアスファルトである。組成比による産地同定などが分析できるのならば、今後の課題としたい。

今回の健全度調査の際に、普段は閉塞している室内に入り観察を行うことができた。吹き抜け室に階段が設置されていたことが壁の漆喰の遺存形状から判明した（図版 14-8）が、階段の取り付け方法については未解明である。

一方、排水施設である隧道肩部の小口径煉瓦構造物の続きはどのような構造になっているのか、カメラが届かず未解明である。少なくとも北側の坑門には南側の開口部のような施設は見当たらない。

今回の調査で収集した砲台建設に用いられた当時の建設材料に関する基本的なデータ及び建築方法を検討する資料は、千代ヶ崎砲台跡でも収集を行っている（野内・川本 2020）。明治 10 年代の建設である猿島砲台と明治 20 年代後半の建設である千代ヶ崎砲台という建設年代の違いは、使用する材料の違いや材料の強度の違いに現れてくるが、共通して大変強固な躯体で構成されていることを確認することができた。

第5節 猿島砲台跡の今後の史跡整備の展望

猿島砲台跡は、国史跡であると同時に都市公園でもある。新型コロナウイルス感染症流行以前は、年間20万人を超える来島者を数える市内有数の観光地でもあった。ここ数年は、夏の海水浴だけでなく、様々なイベントが開催され、市内外や国外にも向けて本市の魅力を発信する拠点の一つとなっていた。

史跡見学のために来島したのでなくとも、レジャーの中で管理棟内の展示スペースや島内の散策で目にする遺構や説明板から、広く文化財を知っていただく機会に恵まれた史跡である。

一方で、史跡整備の課題である遺構の保護と見学者の安全確保を天秤にかけると、危険発生時には人的な安全確保を優先せざるを得ない。平成29年度(2017年度)からの史跡整備開始以降でも、経年劣化だけでなく近年の大型台風の襲来や豪雨被害などで、島内の各所において立ち入り禁止措置を選択した事例がいくつもある。一度立ち入り禁止措置をとると、当然だが、現場での安全対策措置ができるまで公開はできなくなる。

史跡の本質的価値を構成する要素とした明治期の構造物であっても、整備の計画に修理工事をいまだ組み込めない遺構もある。変状をきたしている全ての箇所に対して同じ熱量での保存は難しくとも、優先順位をつけて史跡の保存を図っていく必要がある。ただちに修理工事を計画できない場合であっても、繁殖した樹木の伐採や日常の点検といった行為を開始している。少しでも劣化の速度を緩やかにできるような維持管理の方法を検討し、遺構の保護に取り組んでいきたい。

また、今まで東京湾要塞を構成する砲台跡の中で常時見学可能なものは、猿島砲台跡だけであったが、令和3年(2021年)春からは都市公園でもある走水低砲台跡が公開を開始し、同年10月より猿島砲台跡と同時に史跡指定された千代ヶ崎砲台跡の公開が開始した(両遺跡とも令和4年(2022年)3月現在、土・日・祝日限定公開)。

いずれの遺跡もソーシャルメディアも含め多様な発信が功を奏し、若い世代からも関心を寄せられている。一方で整備・公開活用を計画する本市側も戦争の時代を体験していない世代となつてすでに久しい。各遺跡の価値や歴史的背景、軍事に関する遺跡を史跡として将来に継承していく意義を伝えていくための努力は、意識して継続していかねばならないと考えている。

引用・参考文献

- 岩崎義朗 1952. 一. 猿島の歴史. 猿島. 横須賀市史, No. 7. 横須賀市郷土文化研究室.
- 赤星直忠 1955. 三浦半島城郭史 (下). 横須賀市史, No. 9. 横須賀市教育委員会.
- 高橋 進・青木良輔・大場秀章・中村一恵・大里明博・麻生 恵・岩崎義朗・赤星直忠・藤森照信 1980. 猿島
一現況調査に関する報告一. 観光資源調査報告, VOL. 8. 財団法人 観光資源保護財団.
- 佐山二郎 1999. 大砲入門—陸軍兵器徹底研究. 光文社NF文庫.
- 野内秀明・浅葉孝司・藤山龍造・横山太郎・長谷川静・小島奈々子・剣持輝久 2002. 猿島遺跡群 (猿島遺跡・
猿島洞穴・猿島台場跡・猿島砲台跡) — (仮称) 猿島公園整備事業に伴う確認調査の記録一. 横須賀市埋蔵
文化財調査報告書, 第9集. 横須賀市緑政部・横須賀市教育委員会.
- 野内秀明・建石 徹・高村聡史 2004. 猿島遺跡群2 (猿島遺跡・猿島洞穴・猿島台場跡・猿島砲台跡) —猿島
公園整備事業に伴う確認調査の記録一. 横須賀市埋蔵文化財調査報告書, 第11集. 横須賀市緑政部・横須
賀市教育委員会.
- 野内秀明・福島 保・桜井準也 2005. 猿島遺跡群3 (猿島遺跡・猿島洞穴・猿島台場跡・猿島砲台跡) —猿島
公園整備事業に伴う確認調査の記録一. 横須賀市埋蔵文化財調査報告書, 第12集. 横須賀市緑政部・横須
賀市教育委員会.
- 野内秀明 2007. 猿島遺跡群4 (猿島遺跡・猿島洞穴・猿島台場跡・猿島砲台跡) —猿島公園整備事業に伴う確
認調査の記録一. 横須賀市埋蔵文化財調査報告書, 第13集. 横須賀市土木みどり部・横須賀市教育委員会.
- 野内秀明 2014. 横須賀市 千代ヶ崎砲台跡—明治時代の東京湾要塞を構成する沿岸砲台跡一. 第18回 三浦半島
地区遺跡調査発表会 発表要旨. 横須賀考古学会.
- 野内秀明 2014. 東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡. 横須賀市文化財調査報告書, 第51集. 横須賀市教
育委員会.
- 野内秀明 2016. 史跡 東京湾要塞跡の調査—猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡—. 考古学ジャーナル, 689号.
ニューサイエンス社.
- 野内秀明 2016. 文化財レポート 東京湾要塞跡 猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡. 日本歴史, 第818号. 吉川弘
文館.
- 横須賀市教育委員会 2017. 史跡東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡 保存活用計画
- 横須賀市教育委員会 2018. 史跡東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡 整備基本計画
- 野内秀明 2018. 横須賀市 史跡 東京湾要塞跡・千代ヶ崎砲台跡—東京湾要塞を構成した明治時代中期に建設さ
れた堡壘砲台跡. 第20回 三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨. 横須賀考古学会.
- 株式会社アサノ大成基礎エンジニアリング 2018. 国指定史跡東京湾要塞跡猿島砲台跡地質業務調査報告書
- 株式会社アサノ大成基礎エンジニアリング 2018. 国指定史跡東京湾要塞跡猿島砲台跡現状調査業務委託調査
報告書
- 野内秀明・川本真由美 2019. 横須賀市 史跡 東京湾要塞跡・猿島砲台跡—明治時代前期に建設された沿岸砲台
跡. 第21回 三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨. 横須賀考古学会.
- 株式会社アサノ大成基礎エンジニアリング 2019. 猿島砲台跡旧排水施設調査 (煉瓦造小口径内部確認調査)
報告書
- 野内秀明・川本真由美 2020. 史跡東京湾要塞跡 千代ヶ崎砲台跡. 史跡東京湾要塞跡整備関連報告書, 第1集.
横須賀市教育委員会.

註

- 01) 難波恭一編 1943 現代本邦築城史 (稿本). 陸軍築城部. 国立国会図書館.
- 02) 工 1 より 砲座改築の件 JACAR. Ref. C07050433400 明治 25 年 陸軍省大日記伍大日記 防衛省防衛研究所.
- 03) 猿島第 1 砲台砲床築設火砲据付工事落成報告の件に付申進 JACAR. Ref. C10060374900 明治 26 年 陸軍省大日記陸軍省雑文書 防衛省防衛研究所.
- 04) 土地管理換の件 JACAR. Ref. C04015888500 大正 15 年 海軍省公文備考類公文備考 防衛省防衛研究所.
- 05) 横鎮第 1756 号土地並立木供用替の件 JACAR. Ref. C04016442400 昭和 3 年 海軍省公文備考類公文備考 防衛省防衛研究所.
- 06) 官房機密第 2026 号 11. 9. 5 猿島防空砲台新設の件 JACAR. Ref. C05035354000 昭和 11 年 海軍省公文備考類公文備考 防衛省防衛研究所.
- 07) 横須賀海軍警備隊戦時日誌戦闘詳報 (4) JACAR. Ref. C08030465000 昭和 19 年 1 月 1 日～昭和 20 年 7 月 31 日 海軍一般史料 防衛省防衛研究所.
- 08) 横須賀海軍警備隊戦時日誌戦闘詳報 (6) JACAR. Ref. C08030465200 昭和 19 年 1 月 1 日～昭和 20 年 7 月 31 日 海軍一般史料 防衛省防衛研究所.
- 09) 砲術科兵器目録 横須賀海軍警備隊 JACAR. Ref. C08011401200 海軍一般史料 防衛省防衛研究所.
- 10) 横須賀海軍警備隊戦時日誌戦闘詳報 (5) JACAR. Ref. C08030465100 昭和 19 年 1 月 1 日～昭和 20 年 7 月 31 日 海軍一般史料 防衛省防衛研究所.
- 11) 海岸砲据付方御達の件 JACAR. Ref. C06081743800 明治 26 年 陸軍省式大日記 防衛省防衛研究所.
- 12) 走水低砲台改築の件 JACAR. Ref. C02030504600 明治 36 年 陸軍省大日記軍事機密日記 防衛省防衛研究所.
- 13) 猿島砲台水溜桝等模様替えの件 JACAR. Ref. C07050114200 明治 22 年 陸軍省伍大日記 防衛省防衛研究所.



1. 第一砲台・第二砲座と塁道、高塁道



2. 第一砲台・第二砲座-塁道連絡階段



3. 第一砲台・第二砲座-高塁道連絡部



4. 第一砲台・第二砲座-高塁道連絡階段



5. 第二砲座・砲座面と手摺装着痕の残る階段縁石



6. 調査時の砲座面分界配石南側



7. 調査時の砲座面分界配石北側



8. 旧亥ノ崎台場への階段



1. 高塁道-砲床間揚弾施設・高位構造体



2. 高塁道-砲床間揚弾施設・低位構造体



3. 高位構造体・鉄輪



4. 高位構造体・軸受金具付施設



5. 高位構造体・軸受金具



6. 低位構造体・上部安山岩



7. 崩落天端石



8. 低位構造体・下部安山岩



1. 試掘坑E・全景



2. 試掘坑W・全景



3. 試掘坑S・全景



4. 試掘坑N・全景



5. 試掘坑E・南西横牆被覆壁と崩落した天端石



6. 試掘坑N・胸牆被覆壁と崩落した天端石



7. 試掘坑S・南東横牆被覆壁



8. 試掘坑W・円錐形構造体と六角ボルト

図版 4



1. 試掘坑N・砲床面六角ボルト



2. 試掘坑W・円錐形構造体と外縁鉄板被覆溝



3. 試掘坑W・円錐形構造物の遺存状況



4. 試掘坑N・天端石から出土した鉄板1・2



5. 試掘坑N・「L」字鋼出土状況



6. 試掘坑N・「U」字状切込みのある鉄板3



7. 試掘坑N・円孔のある鉄板2



8. 試掘坑N・円孔のある鉄板4



1. 隧道調査風景



2. 第1トレンチ・アスファルト



3. 第1トレンチ・コンクリート穿孔



4. 第2トレンチ・全景



5. 第3トレンチ・モルタル敷設状況



6. 第3トレンチ・煉瓦造構造物



7. 第4トレンチ・間仕切り石と帯状コンクリート



8. 第4トレンチ・脚壁基礎石と間仕切り石



1. 第5トレンチ・鉄管と煉瓦・アスファルト検出状況



2. 第7トレンチ南側



3. 第6トレンチ・全景



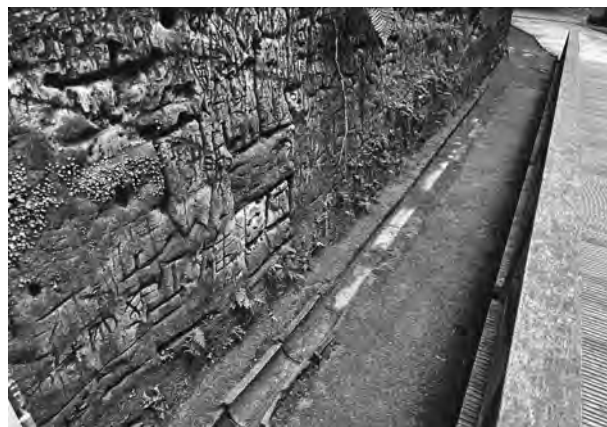
4. 第8トレンチ・全景



5. 第8トレンチ・隧道側端末屈曲部



6. 水溜槽柵検出状況（5次調査）



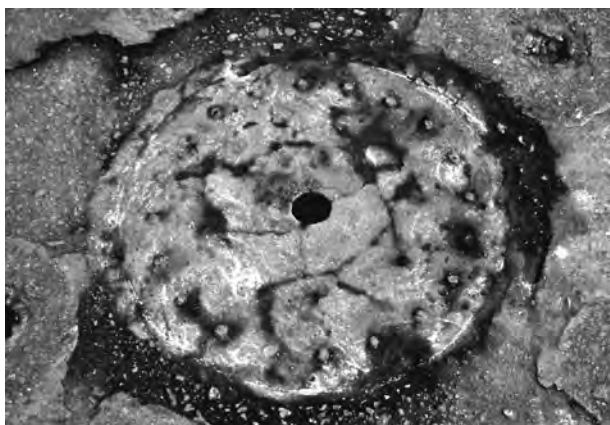
7. 墓道脇の側溝（手前；半径土管製、奥；煉瓦製）



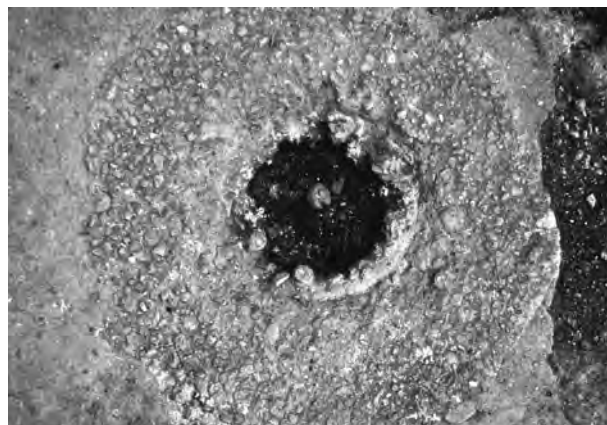
1. 8 cm 高角砲台・第四砲座全景



2. 砲床中央の施設群



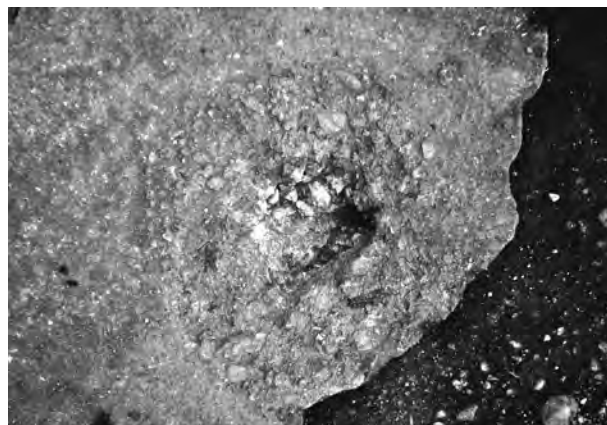
3. 中央円孔と丸鋼円列



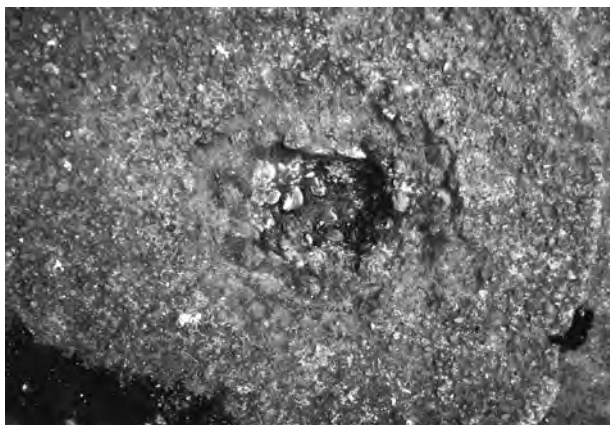
4. 六角ボルト円列 (a)



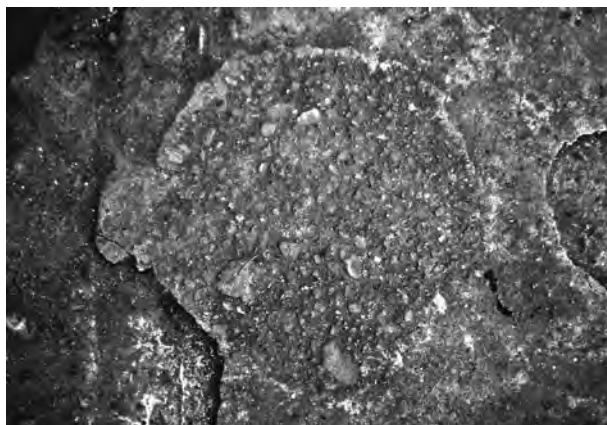
5. 六角ボルト円列 (a) ・ボルトの形状



6. 六角ボルト円列 (b)



7. 六角ボルト円列 (c)



8. 円形コンクリート被覆痕

図版 8



1. 8 cm高角砲台・第四砲座高位・低位排水溝



2. 高位・低位排水溝西側合流部



3. 高位・低位排水溝東側合流部



4. 高位・低位排水溝合流部の形状



5. 低位排水溝合流部



6. 低位排水溝合流部北側に埋設された円形土管



7. 低位排水溝合流部に開口する楕円形鉄管



8. 楕円形鉄管の形状



1. 砲床-砲員待機所連絡階段（東側）



2. 砲床-砲員待機所連絡階段（西側）



3. 西側階段下壁面円孔と「U」字金具



4. 西側階段下「U」字金具



5. 東側階段下壁面円孔と矩形柵



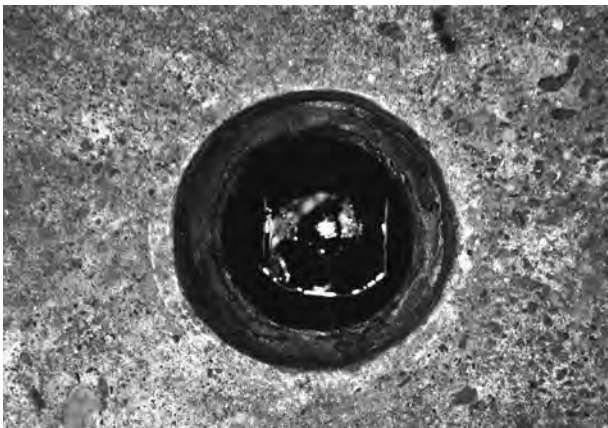
6. 東側階段下「U」字金具



7. 砲員待機所前路面と排水口



8. 鋳物排水目皿



1. 排水溝埋設円形土管



2. 東側円柱壁内の矩形棚



3. 天井が取り除かれた砲員待機所



4. 砲員待機所西壁の「L」字鋼



5. 砲員待機所東側の「L」字鋼



6. 砲員待機所奥壁の桢板痕



7. 砲員待機所西壁の桢板痕



8. 砲員待機所東壁の桢板痕



1. 8 cm高角砲台・第四砲座試掘坑W・S・E



2. 試掘坑E・裏込め確認状況



3. 試掘坑W・完掘状況



4. 試掘坑S・完掘状況



5. 試掘坑E・砲員待機所裏込め



6. 試掘坑W・砲員待機所裏込め



7. 試掘坑S・砲員待機所裏込め



8. 試掘坑W・溝状遺構



1. 現状調査・構造物点検



2. 現状調査・旧補修痕



3. 現状調査・隧道天井煉瓦浮き及び目地抜け状況



4. 現状調査・吹抜室妻壁破損状況



5. 現状調査・コア抜き状況



6. 現状調査・ファイバースコープ観察状況



7. 現状調査・ドリル削孔No.2 湧水状況



1. 現状調査・簡易コアボーリング調査状況



2. 現状調査・B-2採取コア



3. 現状調査・ボーリングコア中の砂層



4. 現状調査・SH貫入試験状況



5. 現状調査・ブロック採取調査区



6. 隧道内部漏水の様子



7. 現状調査・煉瓦造小口径旧排水施設右側（東側）



7. 現状調査・煉瓦造小口径旧排水施設調査状況



1. 現状調査・石製蓋（表）



1. 現状調査・石製蓋（裏）



3. 現状調査・排水孔近接



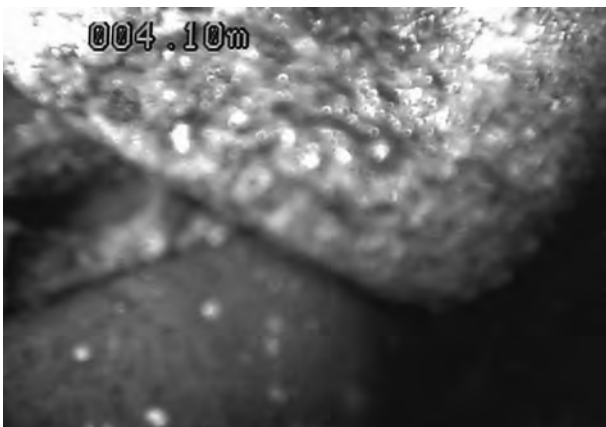
4. 現状調査・右側（東側）内部（隧道側からの排水孔）



5. 現状調査・右側（東側）内部（底面に亀裂）



6. 現状調査・煉瓦造小口径旧排水施設左側（西側）



7. 現状調査・左側（西側）内部（障害物）



8. 吹抜室脚壁（階段痕）

史跡東京湾要塞跡整備関連調査報告書 第2集

史跡東京湾要塞跡

猿島砲台跡

— 史跡整備事業に伴う資料収集調査 —

発行年月日 令和4年(2022年)3月31日

編集・発行 横須賀市教育委員会(教育総務部生涯学習課)

〒238-8550 神奈川県横須賀市小川町11番地

TEL 046-822-8484 FAX 046-822-6849

e-mail:se-bes@city.yokosuka.kanagawa.jp

印刷 丸庄 有限会社

(裏表紙説明)

第一砲台—第二砲台連絡隧道(北側坑口)

